

【原 著】

高等学校における地域課題探究ワークショップの意義
ーファシリテーション能力の育成に焦点をあててー

山田 風紗 桑原 敏典

The Significance of Regional Issues Inquiry Workshops in High Schools-Focusing on
the Development of Facilitation Skills

YAMADA Nagisa, KUWABARA Toshinori

2023

岡山大学教師教育開発センター紀要 第13号 別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education
and Development, Okayama University, Vol.13, March 2023

高等学校における地域課題探究ワークショップの意義

ーファシリテーション能力の育成に焦点をあててー

山田 風紗※1 桑原 敏典※2

本研究は、高等学校の総合的な探究の時間などで取り組まれている地域課題探究学習について、そのねらいを生徒のファシリテーション能力の育成として捉え直そうとするものである。そのために、地域課題探究学習をワークショップの形式で実施している高等学校の実践を調査した。実際には、プログラムの企画・準備段階から実践までのプロセスに支援者として参画するとともに、全体司会やグループ活動のリーダーを務めた生徒に対してアンケートや聞き取り調査を行った。調査の結果、ファシリテーション能力の育成を行うことで、個人の成長や将来を見通した指導の実現に繋がることが明らかになった。また、地域住民や中学生、大学生といった普段の学校生活で関わらない人々とともにワークショップをおこなうことで、大学生から刺激を受けたり、中学生をリードしたりしなければいけないという環境の変化が、ファシリテーション能力の育成をさらに促進させると考える。

キーワード：ファシリテーション、地域課題、ワークショップ、高等学校、地域連携

※1 岡山大学大学院社会文化科学研究科社会文化学専攻博士後期課程

※2 岡山大学学術研究院教育学域

I はじめにー問題の所在ー

本研究は、高等学校の総合的な探究の時間などで取り組まれている地域課題探究学習について、そのねらいを生徒のファシリテーション能力の育成として捉え直そうとするものである。そのために、地域課題探究学習をワークショップの形式で実施している高等学校の実践を調査した。実際には、プログラムの企画・準備段階から実践までのプロセスに支援者として参画するとともに、全体司会やグループ活動のリーダーを務めた生徒に対してアンケートや聞き取り調査を行った。

このような地域課題探究学習が増えた背景に、社会に開かれた教育課程の実現や総合的な探究の時間の設置、学力観の転換による、思考力・判断力に加えて、表現力が重視されるようになったことが影響していると考えられる。中でも、新たに始まった総合的な探究の時間を通して、多くの高等学校が地域課題解決型探究学習に取り組んでいる。このような探究学習は、生徒にとって身近な地域の課題を題材に設定し、課題解決に向けた取り組みを考えるものが多い。また、大学入試の改革による影響も少なくないだろう。大学入試の改革により、

試験だけではなく多様な入試方法が導入されるようになった。学校の成績や試験の結果だけでなく、地域課題探究学習への取り組みを通して、さまざまな学力の生徒が多様な入試方法を用いることで、これまで受けることの難しかった大学にチャレンジできる機会が生まれていると言えるだろう。

Ⅱ ファシリテーション能力育成に関する先行研究の検討

特定非営利活動法人日本ファシリテーション協会はファシリテーションを以下のように定義づけている。

ファシリテーション (facilitation) とは、人々の活動が容易にできるよう支援し、うまくことが運ぶよう舵取りすること。集団による問題解決、アイデア創造、教育、学習等、あらゆる知識創造活動を支援し促進していく働きを意味します。その役割を担う人がファシリテーター (facilitator) であり、会議で言えば進行役にあたります。

学校教育におけるファシリテーション能力に関する先行研究は多くはないが、総合的な学習の時間から総合的な探究の時間へと変化の中で、生徒のファシリテーション能力育成に関する研究が理論的研究、実証的研究の分野からみられるようになった。本研究では、理論的研究として斉藤 (2021) の研究成果を、実証的研究として田村 (2022) の研究成果を取り上げファシリテーション能力の育成について検討していく。

学校教育において、教師でなく、生徒にファシリテーション能力をつけさせることの意義について、斉藤は、これまでの先行研究を踏まえた上で、未来の社会を担う市民としての責任や態度を身につけさせる上で有効であると述べている。また、学級内の人間関係をより緊密なものにするだけでなく、他者と協力して問題解決にあたる態度やよりよい社会をつくろうとする市民に求められる能力についても身につけさせることにつながり、シティズンシップ育成の観点からもファシリテーションは機能を果たすと述べている。

次に田村は、高等学校の総合的な探究の時間における実践を例に、生徒の課題発見と解決能力を高め手法としてファシリテーションの活用が有効であるという実証的な研究をおこなった。具体的に、長野県の高等学校の総合的な探究の時間において約3時間の授業をおこなった。実践結果と分析について、本研究授業の前後で、本日の授業内容に関する興味の度合いを尋ねたところ、授業前にあまり興味がないと答えた生徒が6人いたのに対して、授業後にはあまり興味がないと答えた生徒が0人になっており、このような授業をおこなうことは、生徒にファシリテーションの手法に関して興味・関心を高めることに有効に作用するとした。一方で、本研究の今後の課題として、限られた授業時間の中で、生徒が効率よく思考でき、かつまとめることができる手法と手順を工夫・開発していくことが必要であると述べている。

Ⅲ 岡山県立A高等学校における地域課題探究学習の取り組み

1 岡山県立A高等学校の地域課題探究学習とワークショップ

岡山県立A高等学校では1年に2回、地域住民や隣接する中学校の中学生、大学生等が地域課題について話し合うワークショップ形式の探究学習に取り組んでいる。岡山県立A高等学校の地域課題探究学習は、以下表1で表すように3つのステップに基づいておこなわれている。

表1 岡山県立A高等学校でおこなわれている地域課題探究学習のステップ

1	知る	授業（総合的な探究の時間、その他の教科）
2	深める	ワークショップ、その他の地域プロジェクト
3	行動する	連携先に企画を提案し実行する（イベント開催など）

ステップ1の「知る」段階は授業を通しておこなわれるもので、主に総合的な探究の時間がそれにあたる。ステップ2の「深める」段階は、ステップ1の「知る」段階で学んだ地域のことを、学校外の地域住民の方や中学生、大学生等とともに、さらに考えていく段階である。具体的には、今回取り上げる地域課題探究のワークショップや、地域でおこなわれているプロジェクトに参加することを通して学びを深めている。ステップ3の「行動する」は、地域課題探究のワークショップ等で提案した内容を連携先とともに実行に移していく段階である。これまで岡山県立A高等学校では、最寄り駅の路線でもある地域の鉄道会社とコラボした季節イベントの開催や、地域の夏祭りでのイベント実施がおこなわれている。

次の節では、2022年度に岡山県立A高等学校で実施されたステップ2「深める」にあたる2つの地域課題探究に関するワークショップの取り組みについて紹介していく。

2 「まちづくり」をテーマとするワークショップの場合

(1) ワorkshop開催までの流れ

「まちづくり」をテーマとするワークショップを開催するまでの流れをまとめたものが表2である。以下では、ワークショップ開催までにどのような支援をおこなってきたのかについて紹介していく。

表2 「まちづくり」をテーマとするワークショップ開催までの流れ

2022年7月7日	ワークショップの担当教諭から司会者2名を紹介される。
2022年7月8日	岡山大学で行われるティーチイン岡山と言われるワークショップで司会者をする高校生2名が参加。イベント終了後に簡単な打ち合わせをおこなう。
2022年7月14日	テーマが決定し、話題提供者として美観地区の地域住民の参加が決まる
2022年7月25日	事前指導（スライドの確認、ファシリテーションに関するレクチャー） ※スライドの修正をワークショップ開催まで数回メールでおこなう。
2022年8月18日	ワークショップ開催日

まず、7月7日に岡山県立A高等学校の担当教諭からワークショップ司会者2名を紹介された。同時に、翌日、岡山大学で行われるティーチイン岡山にワークショップで司会者をおこなう高校生2名が参加する旨の連絡を頂いた。目的として、ティーチインがどのようなものであるか知ってもらう、そして司会者の役回りを理解してもらうことで、8月におこなうワークショップのイメージをつけてもらうことがあげられる。

7月8日に岡山大学でおこなわれたティーチインでは、参加者の一人としてグループワークに参加してもらうことで、ワークショップの流れや司会者、グループリーダーの役割について知ってもらうことができた。ワークショップ終了後に、どのようなテーマで8月のワークショップをしたいかという話し合いをおこなった。高校生にとって話しやすいテーマで、かつ、興味があるものがよいという話になったが、この場では決まらず、後日ワークショップの担当教諭と相談の上テーマを決定するという流れになった。その後、約1週間後の7月14日にワークショップの担当教諭からテーマ決定の連絡と、話題提供者として美観地区の地域住民の方に参加していただく方向で調整する連絡を受けた。

7月25日には、司会者とグループリーダーの高校生、担当教諭、岡山大学の2名(大学教授,大学院生)と岡山県立A高等学校で打ち合わせをおこなった。この日は事前指導として、スライドの確認とファシリテーションに関するレクチャーを実施した。その後、スライドの修正をワークショップ開催まで数回メールでおこなったのち、8月18日にワークショップを開催した。

(2) ワークショップの実際

「まちづくり」をテーマとするワークショップの概要を示したものが表3である。以下では、ワークショップのテーマやグループワークで取り組んだディスカッション内容等について紹介していく。

表3 「まちづくり」をテーマとするワークショップの概要

日時	2022年8月18日(木) 13時30分～15時30分
場所	岡山県立A高等学校
参加者	高校生, 話題提供者(美観地区に関わる地域住民), 大学生
テーマ	「美観地区を高校生にとって、魅力あるものにするためにはどうしたら良いか考えよう！」
内容	アイスブレイク(他己紹介) 美観地区に関する話題提供 グループワーク1:「美観地区について考えていること, 不満におもっていること」 グループワーク2:「景観を守りつつ, 未来の町を高校生に知ってもらい活用してもらうためにはどうするのが効果的か」 全体発表 まとめ・振り返り

ワークショップの開催日は2022年8月18日(木)で、13時30分から約2

時間のワークショップをおこなった。参加者は、高校生、話題提供者（美観地区に関わる地域住民）、大学生である。うち、高校生はワークショップの司会をおこなう2名、グループワークのリーダーを務める8名、その他の生徒はグループワークの参加者として、ワークショップに関わった。話題提供は、美観地区で町家の再生や利活用等に関するNPO法人をされている方をお願いした。この方と、ワークショップを担当する岡山県立A高等学校の教諭が以前から連携していたことから実現した。大学生は岡山大学の学部生と大学院生であり、ワークショップの司会者をする高校生やグループワークのリーダーする高校生の支援者として関わった。

テーマは、「美観地区を高校生にとって、魅力あるものにするためにはどうしたら良いか考えよう！」であった。美観地区とは、高等学校が立地している市の中心部にある歴史的伝統的な街並みが残っている地域のことである。なお、このテーマは司会をおこなう高校生による立案である。内容に関しては、まず初対面の参加者同士が打ち解けることを目的に、アイスブレイクをおこなった。毎回、アイスブレイクの内容は司会者の高校生が考えており、今回のワークショップでは他己紹介を用いておこなった。次に、美観地区に関する話題提供を司会の高校生と美観地区に関わる地域住民の方がそれぞれおこなった。司会の高校生は、実際に美観地区にいて撮影した写真を使って美観地区について紹介したり、美観地区の歴史についてスライドにまとめて説明したりした。その後、美観地区に関わる地域住民の方から、どのような背景で美観地区ができたのか、美観地区で問題となっていること等の情報共有をしてもらい、グループワークに取り組むための知識を得た。

ワークショップの核となる、グループワークは2つに分かれており、グループワーク1では、「美観地区について考えていること、不満におもっていること」をテーマに取り組んだ。グループワーク2では、「景観を守りつつ、未来の町を高校生に知ってもらい活用してもらうためにはどうするのが効果的か」をテーマに取り組み、発表に向けたまとめもあわせておこなってもらった。なお、グループワークは各グループにホワイトボードシートを配り、左側半分はグループワーク1の内容、右側半分はグループワーク2の内容をまとめてもらい、中央上部にグループワーク2を通して考えたタイトルを書いてもらう形式で統一した。

全体発表では、グループワーク2で取り組んだ内容を5分以内で発表してもらった。最後のまとめ・振り返りは、話題提供者である地域住民の方に講評を頂く形でおこない、実現可能性に関する話や似た取り組みをすでに行なっているとの共有をしていただいた。その後、司会者の高校生に一言ずつ感想を述べてもらいワークショップを締めくくった。

（3）ワークショップの様子

ワークショップでは、アイスブレイクと話題提供ののち、メインとなるグループワークに取り組んだ。各グループがホワイトボードシートにグループワーク1と2それぞれで取り組んだ内容をまとめ、ホワイトボードシートを用いな

がら全体発表をおこなった。ホワイトボードシートの左側にグループワーク 1 の内容をまとめ、右側にグループワーク 2 の内容をまとめた。中央上部のタイトルは、グループワーク 2 のキャッチコピーとしてつけたものである。ホワイトボードシートをまとめるにあたっては、発表時に見やすく、分かりやすくするという観点から、多色ペンを用いたり、絵を描いたりするなど各班が工夫を凝らした。発表は話題提供者の方に聞いていただき、実際の企画化に向けたアドバイスをいただいた。

以下の表 4, 5 はあるグループがまとめたホワイトボードシート 1, 2 の記述である。なお、括弧は筆者が捕捉したものである。

表 4 あるグループのグループワーク 1 の記述内容

美観地区について考えていること	不満におもっていること
<ul style="list-style-type: none"> ・おしゃれな建物が多い ・(同じような外観の) 建物が同じ ・どんな歴史なのか ・(美観地区で) 何をすれば良いか 	<ul style="list-style-type: none"> ・駅から遠い ・食べ物が高い ・道がわかりにくい ・人が多くて通りにくい

表 5 あるグループのグループワーク 2 の記述内容

タイトル	空き家で江戸時代にタイムスリップ
内容	イベント (夏祭り, 屋台) SNS (インスタ) 建物のライトアップ 灯籠 空き家で一泊 (昔の生活体験, 浴衣の貸し出しなど)

(3) ワークショップの成果

ワークショップの有効性をはかるために、ワークショップの参加者である高校生と大学生を対象に記述式のアンケートをおこなった。本論文では、ワークショップに参加することで生じた高校生の気づきに焦点をあてて記述内容の考察を実施した。高校生の記述内容を分類すると次の A~E の 5 つのパターンに分類することができる。以下は、それぞれの分類パターンにおける具体的な生徒の記述を筆者がまとめたものである。

A: 生徒がどのように地域を見直したか
B: 美観地区について新しく分かったこと
C: グループワークにおける他者への働きかけ(ファシリテーターとしての反省)
D: 自分の内面に関する変化, ワークショップ参加を通してできるようになったこと
E: 探究的な学び, 協働学習に関すること

A: 生徒がどのように地域を見直したか

- ・美観地区は誇れる場所, 光栄な場所というイメージがあったが, 自分たちでなんとかしていきたい, 改善の余地があると思った。
- ・観光地というイメージがあったが, 住んでいる地域住民の方がいる。観光地と住民の暮らしの両立を考える必要がある。

- ・ 食べ歩きをしたり，遊んだりするという場所だったが，建物や景観に関する
こと，美観地区にゴミが落ちているかどうかなど見方が広がった。
 - ・ 美観地区でボランティアをしてみたい。
 - ・ 美観地区にホームページ作成やインスタ映えをしてみたい。
- B：美観地区について新しく分かったこと
- ・ 住んでいる住民の方がいる。
 - ・ 条例によって守られた地区でその区分けには境界がある。
 - ・ 美観地区にはゴミ箱がない。
 - ・ ライトアップ，駄菓子屋の取り組みなど，美観地区ですでに取り組んでいる
ことがある。
- C：グループワークにおける他者への働きかけ（ファシリテーターとしての反省）
- ・ 意見をひきだすことができず，ファシリテーターとしてだめだった。
 - ・ 自分にはできなかつたけど，大学生や先輩が話しやすい空気を作ってくれた。
 - ・ 意見を深めたり，促したりするのが難しかった。
- D：自分の内面に関する変化，ワークショップ参加を通してできるようになった
こと
- ・ 人見知りの自分が話せてよかった。
 - ・ クラス単位が多く，大人数での発表機会がなかったのでできてよかった。
 - ・ パワーポイントが作れるようになった。
- E：探究的な学び，協働学習に関すること
- ・ 話し合いが楽しかった。
 - ・ 色々な年代で話すことができて良かった。
 - ・ 他の班の意見が聞けて良かった。

高校生の感想からプログラムの成果は次の2つであると考えられる。第一は，ワークショップの内容を通して学んだことである。具体的には，美観地区というまちについての認識の変化であり，上記AとBが該当する。第二は，ファシリテーションに関することである。具体的には，話し合いの場をつくること，意見をまとめたりすることを通じた個人の成長とグループワークに関する内容であり，上記C～Eが該当する。

3 「地域のつながり」をテーマとするワークショップの場合

(1) ワークショップの概要

「地域のつながり」をテーマとするワークショップの概要を示したものが表6である。以下では，ワークショップのテーマやグループワークで取り組んだディスカッション内容等について紹介していく。

開催日は，2022年12月23日（金）であった。13時から，約2時間のワークショップをおこなった。参加者は，高校生，地域住民，社会福祉協議会担当者，中学生，大学生である。うち，高校生はワークショップの司会をおこなう3名，グループワークのリーダーを務める12名，その他の生徒はグループワークの参加者として，ワークショップに関わった。話題提供は，地域住民の方と社会福祉協議会がおこなった住民アンケートの結果の一部を用いておこなった。大

学生は岡山大学と地域の私立大学の学生であり、ワークショップの司会者をする高校生やグループワークのリーダーする高校生の支援者として関わったものが大半である。他に、話題提供者である地域住民の方が集めてくださった地域住民の方 10 名程と隣接する中学校の中学生 10 名程が参加した。

表6 「地域のつながり」をテーマとするワークショップの概要

日時	2022年12月23日(金)13時00分～15時00分
場所	岡山県立A高等学校
参加者	高校生, 地域住民, 社会福祉協議会担当者, 中学生, 大学生
テーマ	「年齢関係なく皆が笑顔になれて地域を盛り上げる企画を考えよう！」
内容	アイスブレイク(自分の住んでいる地域で自分しか知らない場所やお店について紹介しながら自己紹介をおこなう) 住民アンケートの結果を用いた話題提供 グループワーク1:「世代の違いを乗り越えよう」 グループワーク2:「年齢の壁を無くし, みんなが笑顔で参加できるような企画・イベントを考えよう」 全体発表 まとめ・振り返り

テーマは、「年齢関係なく皆が笑顔になれて地域を盛り上げる企画を考えよう！」であった。なお、このテーマは司会をおこなう高校生による立案である。ワークショップでは、まず、アイスブレイクをおこなった。今回のワークショップでは、自分の住んでいる地域で自分しか知らない場所やお店について紹介しながら自己紹介をするというものを行なった。次に、地域住民の方と社会福祉協議会がおこなった住民アンケートの結果の一部を用いて地域課題に関する共有をおこなった。本ワークショップでは、アンケートの中の「地区の行事に参加したいと思うか」という質問項目に絞り、紹介をおこなった。話題提供では、司会の高校生がアンケートについてまとめたスライドや、自分の家族や大学生に対して行った「地区の行事に参加しているか」というインタビューの内容を用いて行なった。

ワークショップの核となる、グループワークは2つに分かれており、グループワーク1では、「世代の違いを乗り越えよう」をテーマに取り組んだ。グループワーク2では、「年齢の壁を無くし, みんなが笑顔で参加できるような企画・イベントを考えよう」をテーマに取り組み、発表に向けたまとめもあわせておこなってもらった。なお、グループワークは各グループにホワイトボードシートを配り、左側半分にグループワーク①の内容、右側半分にグループワーク②の内容をまとめてもらい、中央上部にグループワーク②を通して考えたタイトルを書いてもらう形式で統一した。

全体発表はグループワーク②で取り組んだ内容を1分間のショート動画をイメージに寸劇で発表もらった。最後のまとめ・振り返りは、話題提供者であ

る地域住民の方から発表に関するコメントや今後に向けた抱負を頂いた。その後、司会者の高校生に一言ずつ感想を述べてもらいワークショップを締めくくった。

ワークショップ開催までの流れとワークショップの成果については、後述V.A高等学校の取り組みにおけるファシリテーション能力育成の章において詳しく説明するためここではワークショップの様子についてのみ紹介する。

(2) ワークショップの様子

ワークショップでは、アイスブレイクと話題提供ののち、メインとなるグループワークに取り組んだ。各グループがホワイトボードシートにグループワーク1と2それぞれの内容をまとめた。グループワーク1では、普段関わることの少ない、地域住民や中学生、高校生等が世代の違いを乗り越えることを目的に、それぞれが子どもの時に好きだった遊びやテレビ番組について語り合い、面白さを伝え合う内容を取り入れた。グループワーク2では、すでに他の地域でおこなわれている実践例を紹介した上で、みんなが参加できるような企画・イベントを考えてもらった。発表はショート動画をイメージに1分間の寸劇で実施した。

以下の表7、8はあるグループがまとめたホワイトボードシート1、2の記述である。なお、括弧は筆者が捕捉したものである。

表7 あるグループのグループワーク1の記述内容

今の高校生（中学生，大学生を含む）がしていること	お年寄りの方が高校生の頃にしてたこと
<ul style="list-style-type: none"> ・ドラマ ・SNS ・バラエティ番組 ・アイドル 	<ul style="list-style-type: none"> ・歌番組 ・1話完結の2時間ドラマ ・小説ドラマ ・ナンプレ ・数独

表8 あるグループのグループワーク2の記述内容

タイトル	cooking festival ～おいしかったよ。ありがとう～
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・最近の料理を地域の方に教える (大学生，高校生→地域の人) ・地域の料理を教える。 (地域の人→大学生，高校生) ・旬の野菜を使って料理をつくる (地域の人+大学生，高校生) ・学んだことを使って健康になる料理を提供する ・訪問して，リモートでつなげて教える ・作った食べ物を訪問して渡す。

このように、グループワーク1において、参加者、特に高校生は、異なる世代の方が、自分たちとは違う楽しみや幸福感を持っていること、価値観が異なることに気付くことができた。そして、グループワーク2では、自分たちだけ

ではなく、世代や立場を越えてあらゆる人々が楽しむことができるプランを提できるようになったと考えられる。

IV A 高等学校の取り組みにおけるファシリテーション能力育成

1 育成方法

A 高等学校の取り組みにおけるファシリテーション能力育成について、2022 年 12 月に実施した 2 回目のワークショップを例に考察する。ファシリテーション能力育成のために、司会者とグループリーダーを行う生徒に対して事前指導を行った。司会者を対象とするものを 3 回（別途、メールでのスライドの指導を実施）、グループリーダーを対象とするものを 1 回実施した。

(1) 司会者の場合

司会の生徒に対する事前指導の経緯は、以下の表 9 の通りである。

表 9 事前指導の経緯

回	内 容
1	日時：2022 年 12 月 8 日 12 時 30 分～14 時 00 分 場所：岡山県立 A 高等学校 参加者：司会生徒 2 名，担当教諭 2 名，地域住民の代表者 1 名，社会福祉協議会の担当者 1 名，岡山大学 2 名（うち，大学教員 1 名，大学院生 1 名） 内容：参加者の顔合わせ，地域住民と社会福祉協議会の方がおこなった地域住民へのアンケートに関する結果と地域の抱える問題（地区の高齢化）の共有，地域住民と社会福祉協議会の方の話を踏まえたワークショップのテーマ決めディスカッション，ファシリテーターの役回りに関するレクチャーと今後の指導に関する打ち合わせ
2	日時：2022 年 12 月 16 日（金）20 時 00 分～21 時 00 分 場所：オンライン（オンラインミーティングアプリ Zoom を使用） 参加者：司会生徒 2 名，岡山大学 3 名（うち，大学教員 1 名，大学院生 2 名） 内容：司会の生徒が作成したスライドの確認，大学生へのインタビュー（なぜ 20 代は地域の行事に参加しないのか），次の事前指導までにおこなうことの確認
3	日時：2022 年 12 月 22 日（木）12 時 30 分～13 時 45 分 場所：岡山県立 A 高等学校 参加者：司会生徒 2 名，グループリーダー 10 名，担当教諭 2 名，地域住民の代表者 1 名，社会福祉協議会の担当者 1 名，岡山大学 2 名（うち，大学教員 1 名，大学院生 1 名） 内容：参加者の顔合わせ，スライドを使った当日のワークショップ内容の打ち合わせ，ファシリテーターの役回りに関するレクチャー，ミニワークショップ（参加した高校生を 2 つのグループに分けて，大学院と大

	学教授がファシリテーターのデモンストレーションをおこなう)、スライド修正箇所の指導
--	---

打合せを通して、特に全体司会を担当した生徒には、下記の2点について配慮できるようになるよう指導した。

- ① 参加者が、ワークショップにおいて問題を理解し、全体で問題意識を共有できるようにすること
- ② 参加者が自分の意見を持ち、他者に伝えようとする気持ちを持つことができるようなプログラムの構成と当日の支援が必要であること

①については、当日のテーマが、地域の方からの強い願いによって設定されたために、一層必要となると考えた。地域の方と事前打合せを行った司会の生徒は、直接話を聞いているので、今回の問題の地域にとっての重要性や切実性のある程度理解できているが、その他の生徒、特に当日の参加者には、そのことは伝わりにくい。ワークショップの成否は、参加者が真剣に取り組むことができるかどうかということにかかっていることや、参加者が真剣に取り組むためには問題意識を持つことが重要であることや、そのための方法を考えることが必要であると伝えた。その方法の一つは、司会をする生徒自身が問題について調査を行い、問題の状況を、実感を持って把握することが重要である。そこで、周囲の大人に対して、地域社会とのつながりに関するインタビュー調査を行うことになった。そして、司会の生徒は、高等学校の先生、家族、岡山大学の学生に地域社会とのつながりについてのインタビューを行い、その成果を当日の発表スライドに組み込んだ。

②については、ワークショップの実施にはその場の雰囲気や参加者同士の穏やかで優しい関係の構築が不可欠であることから強調した。これまでの経験からも、司会をする高校生は、時間通りに進行することや、決められた内容を正確に伝えることを気にする傾向が強く、参加者の様子に注意を払うことができないことが分かっていた。そこで、当日の内容やスケジュールは固定されたものではなく柔軟に変更できるものであることや、ワークショップで大切なことは何かを伝えることではなく、参加者自身が問題について自分で考え意見を述べることであることを伝えた。そして、当日は、参加者の様子に気を配り、参加者が自分の意見を気軽に述べるできるよう支援をすることが司会の最も重要な役割であると指導し、3回目の打合せではミニワークショップを行い、大学の教員と大学院生自身が、そのような司会の振る舞いを実践して司会役の生徒に示した。

ファシリテーション能力の育成において、当日の実践も重要であるが、そこに至る過程の指導も不可欠である。以上のように、今回の取組では繰り返し行う指導の過程で、司会者としての役割の理解や自覚の形成を段階的に進めていった。

2 ファシリテーション能力育成の意義：実践の結果

ファシリテーション能力育成に関する実践結果の分析をおこなうために、司会者に対して、ワークショップ後にインタビューを実施した。インタビューは

約 20 分間、3 名（生徒 A～C）同時におこなった。インタビュー内容は録音すること、そして、本内容を研究に用いることの断りを入れ、生徒の同意をとった上で実施した。司会者へのインタビューは大きく 2 つに分かれており、一つは、司会をしたことで得た経験に関すること、もう一つは、ワークショップ中の司会者の発言や行動の振り返りに関することである。その一部を、表 10 にまとめた。

表 10 インタビュー調査の結果

<p>質問①：昨日の話（ファシリテーション指導）で印象に残っていることや、今日（ワークショップで）気をつけられたことはありますか。</p> <p>生徒 A：困っている班の様子を見て、アドバイスをしにいく。</p> <p>著者：今日そのようなシーンはあった？</p> <p>生徒 A：あった。何回かアドバイスした。人にアドバイスするのは得意じゃないけど、やってみてこういうふうにしたらいいんだと、ちょっと自信がついた。</p> <p>生徒 B：みんなが話しやすい雰囲気になるように気をつけた。</p>
<p>質問②：今日した司会（ファシリテーター）の経験はみんなにとってどんな意味があったかな？</p> <p>生徒 A：人前にでて話すことが中々なかったので、司会を先生に誘われてやってみようかなと思った。思ったよりやっぱり大変で、スライドを作るにも。それなんですけど、いざ人前に立って話してみると楽しくて、人前でしゃべる勇氣、自信がついたかなと思う。これって、大学進学や面接の時にある程度緊張しないでできるかなと思うし、今度の岡山イオンでの発表もこれを活かして頑張りたいと思う。</p> <p>生徒 B：私はあんまり人前に立つことが苦手なんですけど、今回司会という役をやらせていただいて少しは苦手を克服できたんじゃないかなと思います。またこう機会があれば、司会とかをやって苦手を少しずつ克服していきたいと思っています。</p> <p>生徒 C：人前に立つのが苦手だから（司会を）やってみたんですけど、自分が言ったことに対してみんなが意見をだしてくれて、それがまとめたのを聞くのが嬉しくて、自分でもできるんだなという自信ができました。</p>
<p>質問③：アイスブレイクの時に時間がどうかなという話、短いかな、足りるかなという話があったと思うんだけど、グループの様子とかどんな所からそう思ったのか。結局どうしようと決断したのかな？</p> <p>生徒 C：一人が話したら、話が盛り上がる、話題を広げたいと思う。会話が、繋がるので時間を増やしたけど、ミスだったと思う。時間配分がよくなかった。</p> <p>筆者：何がミスだったの？</p> <p>生徒 C：前回参加した時にアイスブレイクで時間が余っていたからこの時間にしたけど、今回は盛り上がった。</p>

筆者：前回と何が違かったのかな？

生徒C：前は他己紹介だったから。聞いたことをそのまま言うだけで話が続かなかった。今回は、話を広げるような内容だった。

質問①については、生徒Aの発言から、ファシリテーション指導を事前におこなうことで、当日目指す具体的な行動（困っている班の様子を見てアドバイスをしに行く）が明確になっていることがわかる。また、それが当日の行動としてあらわれており、ファシリテーション指導を事前におこなうことの意義があると考えられる。また、生徒Bの発言はファシリテーション指導の中で、ファシリテーターは、みんなが話しやすい雰囲気をつくるのが大切との話から出てきた言葉であると考えられる。実際に当日その点に気をつけて司会をすることができたと述べている。

質問②について、生徒Aは、人前でしゃべる勇氣、自信がついたと述べるとともに、大学進学や面接の時といった将来の進路を考える上でも、必要な経験であったと述べている。生徒Bは、人前に立つことが苦手だが、司会という役をやって少しは苦手を克服できたと述べている。また、機会があればこのような経験をこれからもおこない、苦手を克服していきたいとの発言から、苦手を克服するきっかけとなる経験と意味づけることができると考える。生徒Cも、生徒B同様に、人前に立つのが苦手だから司会をしてみたとして述べた上で、司会に取り組むことで自信がついたと述べていた。

質問③は、自分の具体的な行動や発言の振り返りに関する質問である。アイスブレイクのシーンで、3名の司会がアイスブレイクの時間を調整しようとする動きが見えた。時間の調整については、前日のファシリテーションの事前指導で、決められた通りにする必要はなく、当日のグループの様子をみて判断すればよいと指導していた。生徒Cは、アイスブレイクの時間を決める際に、前回参加した8月のワークショップを参考にしたが、その際のアイスブレイクが盛り上がらなかったから、時間を短くしたと説明した。しかし、アイスブレイクの種類によって、盛り上がる、盛り上がりにくいことがあることをふまえて、また、会話が広がっているからといってアイスブレイクの時間を伸ばしすぎるわけにはいかないという全体のスケジュールから調整しようとする判断を司会役の生徒は行なっていた。ファシリテーターとしての能力が前回のワークショップの参加と今回の司会の経験からさらに醸成されたと考えられる。

以上のインタビュー調査の結果から、ファシリテーション能力の育成は、生徒にとって次の2つの意義があると考えられる。第一は、人前に立ち、自分の意見を述べることに對する抵抗感が減り、その楽しさや面白さを実感するとともに自信を持つことができるようになったことである。質問①や②に対する回答からも分かるように、自信がついたというだけではなく、今後も同様の活動に取り組もうとする意欲を高めていた。今回の経験が、今後の生徒の活動に応用され、さらに生徒の能力の向上に寄与することが期待できる。このような生徒は、過去に行ったワークショップでも見られた。ワークショップに参加しようとしたきっかけは就職や受験といった直近の目標であったとしても、実際に

取り組むことで、生徒はその先にある自分の将来の姿や生き方についても考えるようになり、その中で今回の経験を生かしていきたいと思うようになっていったと言えるのではないだろうか。

第二の意義は、他者との関係の中で、自分の立場からだけでなく他者の立場から物事を考え判断できることや、自分が活動している場全体のことを考えて、自分の判断や行動を決定しようとするようになったことである。質問③の回答に見られるように、ワークショップが始まった瞬間に、司会役の生徒の意識は自分たちが司会を無難にこなすということではなく、その場の参加者がワークショップの積極的に意欲を持って参加できるようになるにはどうすればよいかとか、ワークショップが全ての参加者にとって意義あるものになるためにはどうすればよいかというものに変っていた。これは、事前指導の中で我々が強調していたことであり、その考えが生徒に浸透していた結果である。

V 本研究の成果と課題

本研究の成果は、高等学校における地域課題探究ワークショップが、生徒に地域課題を考えさせるだけでなく、ファシリテーション能力の育成という点から捉えなおすと、それは生徒にとって自分自身の能力や可能性を見直すきっかけとなり、今後の学習や様々な活動への意欲や関心を高めるという意義があることを示した点にある。ファシリテーション能力は普段の学校生活の中でも育成することは可能だが、高校生が中心となり主体的に取り組ませることで、ワークショップが高校生にとって自己実現の場となった。それによって、ファシリテーション能力を身につけることで自分の将来の可能性を広げられるのではないかという認識に至ったのである。また、地域住民や中学生、大学生など異なる世代の人と関わることで、ファシリテーション能力を他者との関わりの中でどのように生かすことができるかについて考えることができ、そのことも高校生が自分の可能性の広がり気付くことを促した。

現時点では、全体の司会を行った生徒のみの分析に限られており、グループのリーダーや参加者として関わった生徒への影響は解明できていない。この点については、今後の課題としたい。また、単発のプログラムとして行っている現在の取組を、学校全体のカリキュラムの中に位置づけ、1年生から3年生までの教育課程の中で体系的に実施することも必要である。

(本稿は、山田と桑原が共同で企画し、山田が論文全体を執筆したうえで、桑原が、全体の調整を行い、第IV章と第V章に加筆をした。)

参考・引用文献

- ・文部科学省『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 総合的な探究の時間編』学校図書, 2019年.
- ・特定非営利活動法人日本ファシリテーション協会 HP
<https://www.faj.or.jp/facilitation/> (2023/01/10 最終アクセス)
- ・斉藤雄次「学校教育におけるファシリテーションの可能性—協同学習を含む既存の学びと熟議の関係に着目して—」名古屋市立大学大学院人間文化研究

—ファシリテーション能力の育成に焦点をあてて—

科『人間文化研究』35号, 2021年.

- ・田村徳至「生徒の課題発見・解決能力を高めるファシリテーションの手法活用に関する実証的研究—高等学校「総合的な探究の時間」における実践を例に一」信州大学教職支援センター『教職研究』13号, 2022年.
- ・桑原敏典『高校生のための主権者教育実践ハンドブック』明治図書, 2017年.
- ・井上昌善「外部人材と子どもの熟議を促す社会科授業構成の原理と方法—地理的分野「地域に届けるハザードマップ」の開発と実践を通して—」全国社会科教育学会『社会科研究』第95号, 2021年.

付記

- ・本研究をおこなうにあたり協力いただいた, 岡山県立A高等学校の生徒と担当教諭, ならびに, ワークショップに参加いただいたすべての関係者の方に感謝する。
- ・本研究はJST科学技術イノベーション創出に向けた大学フェロシップ創設事業JPMJFS2128の支援を受けた研究成果の一部である。
- ・本研究を遂行するにあたり, 多額のご支援を賜りました公益財団法人大本育英会様に深く感謝いたします。

The Significance of Regional Issues Inquiry Workshops in High Schools—Focusing on the Development of Facilitation Skills

YAMADA Nagisa*1 KUWABARA Toshinori*2

This study aims to reconsider the aim of the regional issues inquiry learning conducted in the integrated inquiry class in upper secondary schools as the development of facilitation skills of students. For this purpose, we surveyed the practices of upper secondary schools that implement the regional issues inquiry study in the form of workshops. In practice, we participated in the process from the planning and preparation stages of the program to its implementation as a supporter, and conducted questionnaires and interviews with students who served as plenary moderators and group activity leaders. The results of the survey revealed that the development of facilitation skills leads to the realization of personal growth and future-oriented guidance. In addition, we believe that the change in the environment in which students are stimulated by university students and have to lead junior high school students through workshops with local residents, junior high school students, and university students, who are not usually involved in their school life, will further promote the development of facilitation skills.

Keywords: facilitation, community issues, workshop, community collaboration

*1 Graduate School of Humanities and Social Sciences

*2 Faculty of Education, Okayama University